

森林は今

収穫期を迎えた森林

ときがわ町に限らず全国的に、山の木は伐って使う時期となりました。戦後の拡大造林政策により一斉に植えられたスギやヒノキの人工林は、伐採して使うのに適した時期（収穫期）を迎えています。

それでは収穫期を逃すと具体的にどのような影響が生じるのでしょうか。伐らずにそのまま植えておけば、木はさらに育つから、無理して伐らずに残しておけばいいのでは……そんな風にも思えます。

しかし、このまま伐らずにいくと新たな植樹ができず、森林にも人間社会と同様に「少子高齢化」が進みます。高齢化した木は二酸化炭素を吸って酸素を作り出す働きが衰えるため、二酸化炭素吸収源としての役割を考えた上でも、収穫期の木を伐って若い苗木に更新することが重要なのです。

伐採できない林業の現状

伐っても収益につながらず、費用ばかり

がかかってしまうのが、今の林業の現状です。伐採した木を売るためには、山の中から運び出す必要があります。しかし、これには道や道を切り開くための機械、機械を使って作業をする人たちなど様々な費用が必要です。

問題なのはこの費用に見合うだけの収入が望めないこと。森林所有者は木を伐っても収入につながらないため、森林整備をしたくてもできず、子どもたちに林業を継がせたくても現実的に難しい状況にあります。後継者問題と合わせて負の連鎖が生じているのです。

森林荒廃がもたらす影響

こうして、伐採されず手入れもされず、放置され荒廃していく森林。人の手で植えられた木が高く成長し、光が射し込まなくなってきた暗い森林の土壌には、本来生えるべき植物が育たず、降った雨を蓄える機能が低下しています。その結果、台風等の大雨により土砂災害を起こしやすくなり、本来あるべき森林の公益的な機能

能が十分に発揮できなくなっています。収穫することが目的の人工林なのに、伐採して、使って、植えて、再び育てるというサイクルが回らず、森林資源は使われない……。

価値が見出されず

見捨てられる恐れがあるのが今の森林なのです。



昭和30年代の大野地区



現在の大野地区

成長を続ける森林資源

ときがわ町内の森林の様子。昭和30年代と比較すると、現在は樹木が密集している状況がよく分かる。